「女性白門会」35周年記念

シンポジウム

社会の「建前とホンネ」…女性たちの今をみつめて

中大卒の女性学員でつくる「女性白門会」（会長＝北村敬子商学部教授）の創立35周年記念のシンポジウムが5月8日、後楽園キャンパスで開催された。テーマは「今、女性たちは……日本、アジアそしてアメリカ」。中大も全学平均で女子学生が3割を超えるまでになったなかで、在学生にも身近な主題である。当事者の関心をもって傍聴した。

学生記者　阿部恭子（総合政策学部3年）／西原香保里（経済学部3年）

理工学部3号館小ホールの壇上に、パネリストとして角田邦重中央大学学長、柳井俊二法学部教授、イ・ヒョンナン総合政策学部助教授が出席。北村会長をコーディネーターに、前半は、順に日本、米国、韓国の女性事情を概説した。

日・米・韓の女性事情

◆「花の」女子大生の暗転　男女雇用機会均等法の施行は86年だった。日本の事情はどう変わったのだろうか。労働法が専門の角田学長は、女性の雇用者数は全体の40・1％にも達しているが、賃金面でみると男性の平均賃金の65％にとどまるなどのデータを示して、「企業社会の建前と本音」の問題点を指摘した。

「中央大学の今春の卒業式では女性の総代が目立ち、法学部は3学科とも女性でした」と身近なエピソードも。「大学ではそれほど優秀で元気もいいのに、社会に出ると、女性は自分が急に小さくなったように感じる。逆に、大学のゼミで小さくなっていた男子学生が急に偉くなったように振る舞うんですね。原因は会社では能力とは別の尺度がまかり通っているから。おもしろそうな仕事が男性に集中するのです」

妙にリアリティのある話だ。

◆米でも印象とのギャップ　続いて柳井教授のテーマは「アメリカのウーマン・パワー／その実像と虚像」。柳井教授は前駐米日本大使である。米国では男女共同参画の問題が人種問題と複雑にからむ多民族国家特有の事情にも触れながら、ケネディー政権下「女性の地位に関する小委員会」にはじまる女性の地位向上の推移を語った。「ケネディやジョンソン大統領のとき男女平等に関する法律がたくさんできた。クリントン大統領も関心をもっていた。彼は女性問題で失敗しましたけどね」

一般にアメリカ女性は自立心が高く、地位も高いように思われている。しかし女性国会議員数はスウェー

イ・ヒョンナン総合政策学部助教授

柳井俊二法学部教授

角田邦重学長

デン45％に対し、米国14・3％。ここにも「印象と実像にギャップがある」らしい。

◆米・日上回る韓国女性の進学熱　儒教的価値観が根強い韓国でも98年「女性部」が設置されるなど両性平等への機運が高まっている。イ助教授によると、「経済の高度成長とともに女性の教育水準の向上が著しい」という。03年統計で、女性の高校進学率は95・3％、大学進学率も70・9％と驚異的な高さで、米（00年66・2％）日（01年32・7％）をはるかに凌駕する。

「半面、大学を出ても就職できない状況もある。また離婚率が米国に次いで世界2位、合計特殊出生率が1・17と世界1低いなど家族観や結婚観の変化に伴う過渡期の問題も抱えている」と助教授は話した。

「印象と実像」のギャップ

前半の事情説明を踏まえて、後半はディスカッションが行われた。

議論の中心は、「3カ国とも女性に対する雇用機会の平等の法整備も整ってきていることが分かったが、それなのになぜ未だに女性が昇進や賃金面で差別を受けているのか？」という問いである。

北村敬子女性白門会会長・商学部教授

柳井教授は、米国でも制度のレベルと、社会で女性が真に平等を実感することにズレがあることを否定しない。米国での生活体験を通して「男性中心の部分があり、女性への不平等感が強く残っている。制度は充実していても実情は違う」と語った。女性にとって、本当の「機会平等」への道は、なお長期戦であるということが分かる。

会場からは、「一部の国でなされているように、日本でも議会においてクオーター制を採用すれば、雇用にもよい形で反映されるのでは」といった意見が出された。

「クオーター制」とは、特定の割合で女性を議会の委員や選挙の候補者とするポジティブ・アクションの一つだが、角田学長は、「いきなり議会で、『4割は何が何でも女性』と決めてしまうと選択の余地が狭められ逆差別につながる可能性もある。まず政党でのクオーター制から始めるのならば可能ではないか」と意見を述べた。

海外の例を見ても、スウェーデンやドイツでは政党でのクオーター制を導入しており、それによって女性の政治参加が著しいという。一方、韓

国では企業におけるクオーター制を数年前から導入しており、女性リーダー開発プログラムなども盛んに行われているそうだ。

他方では、柳井教授が指摘するように、入学、就職などで少数派民族や女性を優遇する積極的措置「アファーマティブ・アクション」を制定した米国では「逆差別」との批判から見直しの機運にあるのも事実だ。

「家事OKの男と結婚なさい！」

また、仕事をずっと続けたいという女性が日本でも増えている現状から、「結婚、出産後も仕事を続けていくためには、夫婦間で育児・家事分担をすべきだ」と総合政策学部生（女性）の発言もあった。これには北村会長が、「結婚後、相手に家事の分担を求めることも大事だが、家事を進んでしてくれそうな相手を見つけることよね。あなたもそうしなさい！」と、笑いながら。家庭内の協調が普通のこととしてもっとスマートに行われるようになれば〝女性の静かなストライキ〟といわれる低出生率も少しは上がるかもしれない。

中大の女性環境は？

ところで、中央大学の女性事情はどうなのだろう。「女性白門会」がまとめた資料には、全学部平均で女子学生が31％と「慶応並み」になった推移などとともに、教職員の男女比率という興味深いデータがある。85年と04年を比較した場合、教員は2％→8％、職員26％→35％、管理職0％→9％……。へぇそうなの、と嘆息するか、多少とも前進とみるか。

角田学長は、「21世紀は実学の時代といわれているように、これからは中大でも女性の持つ感性や才能を大事にしていきたい」と述べた。

――「女性白門会」の記念イベントだが、会場の顔ぶれは7割方が男性と、なぜかこも〝男性優位〟。のちの懇親会は和気あいあいの雰囲気で、35周年を祝う男性陣からのフェミニンな祝辞や花束贈呈などが続いた。なかで、会長の北村教授が4月「中央大学副学長」に就任したと、その場では初耳の報告に、「女性白門会」の輪から一段と大きな拍手がわいた。

藤本幹子・前会長（学員会副会長＝写真左）もにこやかに

女性白門会

1968年に誕生。当時の名称は白門婦人会。男女雇用機会均等法が制定されていなかった当時、女性への社会的な壁は厚く女子学生の就職も選択が限られていた中で、女性たちの声を社会に発信する目的で創設された。

以降、女性問題の課題に取り組み、中央大学女子学生の就職を支援する「ウイングの会」（旧つばさの会）では毎年シンポジウムを開催し、実践的なアドバイス中心の講演・講座が好評を得ている。